いのちと健康を守る活動

昨年 8-12 月に 17 人、今年 1-3 月には 29 人　―　PIHS 助産所での出産は着実に増えています　―

8 月に保健省、10 月には健康保険公社の認可を受けた助産所で生まれた赤ちゃんは 3 月末で 46 人になりました。しかし、前 96 号でもお伝えのように、貧困世帯の保険加入率は未だ低く、保険収入は限られています。当団体の医療自立支援会費や助産所寄付金送金分を加えても、有資格助産師 2 名の給与支払いが遅れがちという厳しい運営が続いているようです。

PIHS の長年の母子保健推進の活動に対しては、保健省や保険公社も高く評価しています。施設面でも助成機関や会員のご協力で、厳しい認可条件をクリアーしたものになりました。代表のナプサさんをはじめ、日々新しい命と向き合っているスタッフには、初志貫徹で頑張ってほしいと伝え、これからの 1 年、最長 2 年間、私たちが助産師給与分を支えることにして、新年度予算案に計上しました。現地には妊産婦を含む貧困世帯の保険加入推進の活動に力を入れてほしい旨伝えました。引き続いて皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

避難地を定住できる緑豊かな地に　― ヤギプロジェクト事業地域ムジャの背景と今後の展望 ―

前号でもご報告のように、ヤギプロジェクトは、コミュニティー・ベース母子保健研修の財源確保を目的として始まり、ヤギ飼育に欠かせない地下水くみ上げ式水道２基（右下写真）も、ヤギと同じ会員のご寄付で完成しました。

このヤギ・水道プロジェクトの現況報告を受ける中で、事業地域ムジャが、ミンダナオの民族問題を象徴する地域であることが分かりました。1960年代のマルコス政権下、政府軍との戦闘で、マアシム、キアンバ、パリンバン町などのモロ民族はアガさん、ナプサさんの家族・親族を含めて、避難民としてジェネラルサントス市や近郊に移住しました。一方で、これらの地域には古くから伝統的土地所有形態のビラーン民族が多く住んでいて、避難民の一部はビラーン民族から土地を譲ってもらい定住を始めたということです。

約100世帯が住むというこのムジャの最大の課題は、乾季には草木が枯れて緑が極端に少ないことです。ヤギプロジェクトをきっかけに　①ヤギや鶏の糞尿利用の有機農法による果樹や野菜栽培を推進する　②平日は年少児童のため、週末は母親学級になるコミュニティースクールを開設する、という貧しいビラーン、ムスリムなど先住民族が住む荒地を、緑豊かな村に変える希望が生まれました。

今泉誠子さんの呼びかけで寄贈した車

2007 年に誠子さんが呼びかけて、PIHS に診療車を寄贈しました。PIHS は貧しい村々を巡回し無料診療を続けていました。村々を回るのに、炎天下でも雨でもバイクにスタッフが何人も乗って訪問しているのを見て、誠子さんは車の寄付をしようと会員に呼びかけ、不足分は補って下さり、日産バネットを寄贈しました。今回車いすを渡すのにナプサさんに同行した時、誠子さんが呼びかけた車で迎えに来てくれました。

かなり前に調子が悪くなり、そのまま倉庫にしまわれていましたが、誠子さんの訃報に接し、せっかく誠子さんから頂いた車を活かしたいと、修理に出したとの事。ナプサさんの夫ハッサンからも誠子さんに対する感謝の念を聞きました。誠子さんのPIHSに対しての思いが、夢だった助産所開業に繋がったと思います。今は緊急支援が必要な妊婦さんを運ぶのにも役立っています。ミンダナオの青い空の上から見守って下さっている誠子さんを身近に感じました。　（相田）

車いす４台届けました！

昨年のアガさん渡航時に続き、この３月末のアガさん、相田さんの現地訪問に際しても、日本社会福祉弘済会（日社済）のご協力で、大人と子ども用各２台の車イスを届けることができました。日社済の「空飛ぶ車いす」事業は、中古車イスの修理・整備を担当する全国の工業高校生のボランティア活動に支えられています。（写真は、11 歳の脳性麻痺の少女に寄贈された 1 台です）